論 文

中国の少数民族におけるキリスト教の受容に関する研究

―― 雲南省禄勧県の苗族（ミャオ族）を中心に[1]

徐　亦　猛

はじめに

これまで中国における農村のキリスト教受容の状況についての研究を積み重ねてきたが，中国におけるキリスト教受容の問題を考察する際，単に漢民族を取り上げて検討するだけでは，不十分であり，中国の少数民族の信仰状況やキリスト教の受容について考察する必要がある。周知のように中国は，悠久の歴史をもつ文明国の一つであり，約56の民族からなる多民族国家でもある。中国の長い歴史をふりかえると，少数民族問題は常に歴代王朝にとって社会安定を行うための最重要問題であり，1949年の「中華人民共和国」成立以後も，政府が解決すべき最優先課題として位置づけられてきた。現代の中国少数民族において経済，政治の成長と共に，キリスト教の広がりが非常に著しい。この現象は，中国少数民族の宗教研究においてきわめて興味深い課題である。従来，それぞれ文化，伝統が異なる中国の少数民族の宗教的基盤は伝統的な原始宗教である。しかし，中国の少数民族の間に非常に浸透しているのは，少数民族の伝統的な原始宗教や絶大的な影響力をもつ儒教，道教，仏教などといった漢民族の伝統的な民間信仰ではなく，西洋文化の根源であるキリスト教である。キリスト教は外来の宗教として，中国少数民族の伝統的な原始宗教，道徳規範，既に形成されていたライフスタイ

ル，及び少数民族の本来の文化と社会的構造に深刻な影響と衝撃を与えたのは，間違いない。中国西南部に位置する雲南省は，25の少数民族が居住する中国でも最も複雑な地域である。さらに，雲南省における諸少数民族は祖先を人間の力で神様のように信仰して崇拝し，この信仰と崇拝で民族の生活方法を支配し，自分自身の行為を規範するゆえに，独特な雲南宗教文化を形成した。雲南省本土の少数民族は長期的につづく閉鎖的な環境の中で暮らしているので，伝統的な原始宗教が保留されてきた。清朝末期から各時代の中国政府はこの地の少数民族に様々な同化政策を行ってきたが，その根幹には，少数民族子弟に儒教と道教の思想と信仰儀式を押し付けた。しかしこの地では，少数民族の伝統的原始宗教の社会的基盤が非常に強いため，漢民族の宗教と文化は終始諸少数民族からの頑強な抵抗を受け，今日まで普及してこなかった。

こうした歴史的と社会的背景のもとに，なぜ西洋の宗教と呼ばれるキリスト教は中国の少数民族において急速に成長しているのか。村全体がキリスト教に改宗している現象の背後の原因は何であるか。中国の少数民族の信仰状況は何であるか。本研究は，歴史的，宗教学的な視点から，雲南省禄勧県の苗族を中心として現地調査を行い，上記の問題点について包括的に考察し，解明すると同時に，今後の中国の少数民族におけるキリスト教のありかたを探ることを目的とする。これは，現代の中国における少数民族のキリスト教の変遷発展ついて理解を深める上で，重要な意義がある。

多くの外国の研究者も，中国の少数民族の宗教の研究について注目してきた。日本の学者鈴木正崇は，その著作『中国南部少数民族誌：海南島，雲南，貴州』（三和書房1985年），及び論文「ミャオ族の神話と現代 —貴州省黔東南を中心に」[(2)] において，文化人類学の立場から詳細に中国少数民族の原始宗教や，中国貴州省の黔東南苗族侗族自治州で暮らす苗族の人々を中心として，彼らが伝えてきた神話に焦点をあて，神話

の起源，伝承，変遷及び祭祀活動について考察し，中国国内でも高い評価を受けた。生明慶二は，その論文「ミャオ族の祭祀芸能にみる響きの古代性」[3]（1990年）において，ミャオ族の祭祀芸能をテーマとして，民族の精神文化の基層に存在する音文化について論じた。またアメリカの学者William, Hudspet. Hは，その論文（Stone-Gateway and the Flowery Miao）において，宣教師の日記と回想録を使って，20世紀初期のキリスト教の中国雲南省少数民族社会への影響と結果，そして原始宗教との関連について論じた。しかしこれらの研究は現地調査を踏まえたものとは言えず，主に理論的論述が主体になっている。中国国内の少数民族の宗教調査の制限によって，実際の現地のデータと一次資料が不足しているために，充分に少数民族におけるキリスト教の受容について論じるには限界があると言える。

中国大陸の研究者の間では，中国雲南省少数民族の宗教問題に関する研究も非常に活発化している。中国民族事務委員会と中国科学院の共同研究のもと，『雲南民族民俗和宗教調査』，『雲南少数民族社会歴史調査資料集』，『雲南民族情況集』，『基督教与雲南省数民族』などの専門著作が相次いで刊行された。著作の中に民族宗教に関する一次資料が多く収録されているため，雲南省少数民族の宗教問題を研究する際，欠かせない参考文献である。

キリスト教関連資料を収録したものとしては，東人達の『**滇黔川辺基督教伝播研究**（1840-1949）』（人民出版社，2004年），銭寧編『基督教与少数民族文化変遷』（雲南大学出版社，1998年）が挙げられるが，これらは主たる内容はキリスト教の広がりと影響，現状報告で，事実の叙述にとどまっている。

いずれにしても，これらの研究者たちは，雲南省少数民族の原始宗教を中心にして，宗教社会学の立場から少数民族の宗教情況について検証するだけである。現代の少数民族社会（特に苗族）において，キリスト

教はどのようにして原始宗教を超え，少数民族の間で著しく広がったか，少数民族はどのような動機のもとにキリスト教を受容したかなどの重要な問題については，ほとんど論及していないので，具体的な現代中国の少数民族の宗教的状況を把握することは出来ていないと言えるであろう。

本論文は，筆者が交通の不便な山岳地域である中国の雲南省昆明市禄勧県の管轄する一つの苗族のＸ村落に住み込み，現地の研究協力者を通して，村の苗族の住民と信頼関係を築き，観察，インタビュー，活動参加という伝統的な研究方法を通して，キリスト教信仰をもつ住民たちの日常生活とキリスト教礼拝活動を綿密に記録することを試みたものである。その調査から得られる一次資料とデータを駆使し，理論的な分析を通して，中国の少数民族の宗教的状況を把握することを目指したい。

一．苗族における原始信仰

苗族は中国において最も古い，人口の多い少数民族の一つであり，商周時代においてはその祖先は江漢平原に住み，「農耕民族」と呼ばれた。しかし，圧倒的に強い漢民族支配者の抑圧によって江漢平原から追い払われ，西南の方へ移転させられ，結局山奥の山岳民族となった(4)。

伝統的な苗族の精神構造において，宗教は中心的な地位を占めた。先祖から継承された苗族の宗教は，社会の変化に伴って一定の変化を遂げた原始宗教である。雲南省社会科学院宗教研究所の楊学政の「原始社会における民衆の意識，行為，精神，物質すべては，原始宗教の中に含まれている」(5) という定義に則せば，苗族のキリスト教受容を考察するためには，まずこの原始宗教を分析する必要がある。

伝統的な苗族の原始宗教は主に自然崇拝と祖先祭祀である。彼らにとって，すべての自然現象の背後に超自然的な力があると認識してい

る。山の神，樹木の神，雨の神，火の神などといった自然現象をすべて神であると信じている。例えば，強い雨と激しい風などの災害に遭った時，黄色い蝋燭を燃やし祭祀を行い，子供が病気になった時，石の神に拝み，また大人が病気になった時，豚を殺し井戸の神に捧げ，その後，井戸水を取り，いわゆる「霊水」として病人に与えるなどである。さらに各家庭は福の神を迎えるため，紅い布を門の上方にある横木につけ，鶏を殺し供養し，福を求める。祖先祭祀について，苗族は様々な祭りを通して，祖先に対して敬意を表し，原始宗教の中心部分となる。その中で，最も大きな祭りは「祭鼓節」である。伝統的な苗族は7年おきに小祭，13年おきに大祭を行い，祭祀の期間は農暦の10月から11月まである。その時子牛100頭を殺し，民衆は踊りながら，先祖の苦労を忘れず，「木鼓」という太鼓を叩くことで呼び起こした先祖の魂を礼拝し，先祖からの守りを祈願する。

漢民族及び彝族など有力な支配層からの排斥と打撃を受けた苗族は，長い間，物質生活と精神生活両面が窮乏し，閉鎖的な社会環境の中に閉じ込められた。苗族は単に経済的貧困状態に陥っただけではなく，文化的貧困が一層苗族の社会の発展に深刻な影響を及ぼした。文化的貧困によって，現実の環境を変革するための精神力と知識技能の支持を得られなければ，人々は伝統的な模式と自然からの支配に従属するだけである。そのため，苗族は自然に祖先から伝えられてきた原始宗教に頼るしかなかった。従って，自然崇拝と祖先祭祀が中心になる原始宗教は，苗族の農耕部族社会生活上の主要な文化となる(6)。物質と文化の乏しい社会において，原始宗教の役割は死，病，飢餓，洪水などの人生問題に対応する能力を強化することである。悲劇，危機に出会った時，原始宗教は苗族の民衆に慰め，安全感，生命の意義を与え，貧困と欠乏を突破し，乏しさからもたらされた挫折感を償った。苗族にとって，原始宗教は，あらゆる幸運と不幸に適応する最も大切な手段であり，彼らの独自

の生活の現実や乏しい経験から生まれたのである。

原始宗教は苗族の精神構造上の核心的な位置を占めたため，現実の生活と緊密な関係を持ちながら，社会的機能を果たした[7]。苗族は自分のたちの幸せや生活の安定は祖先がもたらしたと考えるので，最高の信仰対象は祖先である。普段は孤立的に暮らしを営んでいる苗族は，祖先祭祀を通して，大規模な村落間の交流を行ない，配偶者を見出す機会を設け，社会関係を強化した[8]。さらに，原始宗教は苗族の生活の規範となり，社会行為を拘束する役割を果たした。原始宗教は法律ではないが，民衆は神や祖先に対する崇拝を絶対化するので，神や祖先が人間を裁く主体であると理解し，「神判」という特殊な宗教活動が形成された。神判とは，神や祖先の絶対性を利用し，部族社会の掟を破った人々を裁くことである。その意味において，原始宗教は社会の安定を維持する基盤である[9]。

苗族社会では，こうした伝統的な原始宗教の体系が，長く維持されてきた。

二．苗族における初期キリスト教伝道

19世紀後半，プロテスタント宣教師は相次ぎ雲南省に入り，大都市部において宣教活動を展開したが，著しい効果が上がらなかった。中小規模の町に宣教活動を転じても，漢文化の強い影響で，キリスト教徒の増加は非常に緩やかであった。しかし19世紀末，滇（雲南の別称）西北部の大理，東北部の昭通などで，英国循道公会，中国内地会の宣教活動が活発に行われるに従い，苗族の信徒数は急速に成長し，漢民族の信徒数を超えるに至った。1881年中国内地会の宣教師クラーク（George Clarke，克拉克）は上海からいったんビルマを経由して大理に入り，最初のプロテスタント教会を建てた。その2年後，同じ中国内地会のイ

ギリス人宣教師サリバン（Thomas Thorned，索理仁）が上海から四川の宜賓を経て雲南に入り，雲南の東北部の昭通，東川で宣教活動を行い，教会を設立した。その後，循道公会の宣教師ポラード（Samuel Pollard，柏格理）も四川を経て昭通で教会を設立した。

20世紀に入ると，苗族伝道はますます盛んになった。例えば，1903年中国内地会のイギリス人宣教師アデーム（J.R. Adaeme，党居仁）は，貴州安順の苗族地区での伝道活動に成功し，現地及び周辺の苗族から「苗族の王」と奉じられた。そのため，安順から遠く離れた雲南・貴州境界地域の多くの苗族も安順へ赴き，キリスト教に改宗した。雲南の苗族が安順に行く道程の遠さに鑑みて，アデームは彼らが昭通に赴き，英国循道公会の宣教師ポラード牧師（Samuel Pollard，柏格理）を訪ねるよう紹介した。1904年7月アデームの手紙を携えた4人の苗族が昭通にポラードを訪ねた。この4人の到来は，苗族のキリスト教歴史上に新しい1ページを書き添えたと同時に，ポラードの宣教活動の転換点ともなった。ポラードは彼らを暖かく歓待し，彼らに教義を伝え，さらに帰ったら苗族同胞に昭通へ来て入信することを勧めるよう頼んだ。その後，苗族は一団また一団とやってきた。彼らは穀物袋を背負い，山を越え，川を渡り，昭通の循道公会へやってきた。昭通の教会で，ポラードは彼らに水と煮炊きの火，寝る場所を用意し，そしてキリスト教の教義を授けたのである。雲南・貴州の多くの苗族が1904年（辰の年）にキリスト教に改宗し，彼らはこの歴史を「龍年得道（辰の年に道を得る）」と称した[(10)]。

苗族が積極的にキリスト教に改宗したのは，主に以下の原因である。第一に，宣教師の働きがある。多くの苗族の改宗者が現れたので，ポラードはこの辺鄙な場所に生活する民族こそ，自分の宣教理想を達成する最もよい対象であると理解した。もともと苗族は固有の文字を持たず，歴史・神話・伝説・習慣や規則，日常の知識は口頭で伝えられてき

た[11]。ポラードは苗族に対する宣教活動を深めていくため，ほかの宣教師と一緒に苗族の文字を創り，聖書や苗族の口伝の歴史・神話・伝説などを文字化した。また，ポラードは苗族の伝統的な観念を破り，男女共学の学校を設立し，苗族に文字や聖書の知識を普及した。ポラードは苗族の住民に「勉強して字を覚え教養が身についたら，他民族からばかにされない」という理念を教え，多くの苗族の若者に入学するように勧めた。ポラードが苗族社会に展開していた学校教育によって，苗族全体の非識字者の数が少なくなり，自身の文化遅れによる他民族からの差別から抜け出した。

雲南の苗族は清朝乾隆皇帝の時，戦乱と飢饉のために多く雲南に逃れてきた。雲南に逃れて入る以前，既にほかの民族（漢民族，彝族など）は肥えている土地を占領したが，苗族は長年にわたって培った素直に受けて忍ぶ民族性のゆえ，交通不便で辺鄙な山岳地域に住むしかなかった。このように厳しい生活環境のもと，苗族は平地農耕の生産方式から山地農耕物の栽培に移り変わり，漢民族や彝族などと比べて，経済発展は非常に遅れていた。苗族はほとんど小作農であり，地元の土司[12]に年貢を納め，生活水準はまわりの他の民族より低かった。そのほかに，苗族は外部の他民族とは接触したり，交流することもほとんどなかったし，長い間，他民族（特に漢民族の支配階級や周囲の彝族土司・地主）より圧迫され，基本的な人身自由と権利さえ保障されていなかった。その問題に鑑みて，ポラードは西洋の宣教師の身分をいかし，現地漢民族の官吏や彝族土司に迫害をやめるように働きかけると同時に，苗族居住区に教会を建設し，直接住民の安全を保護し，漢民族の支配階級や周囲の彝族土司・地主より横領された財産を取り戻し，苗族に返した。苗族の住民はこの恩に感激し，多くの改宗者が現れ，信徒の人数は急速に増加した。

第二に，苗族自身の動きが挙げられる。社会から見捨てられたような

苗族は，キリスト教が民族の救いと希望であると理解した。苗族の口伝の神話・伝説には創世神話，始祖神話（十二の卵と人間の誕生），洪水神話（人間の社会の生成）が含まれているが[13]，苗族はノアの箱舟など聖書の話を自分の民族の神話にこじつけ，自分の民族は古来のユダヤ民族であることや，キリスト教が先祖の信仰であると認識した。苗族にとって，ポラードは旧約聖書の中のモーセであり，神がポラードを遣わし，彼を通して苗族の元来の姿，すなわち秦，漢の豊かで強かった時代が再現されると信じた。

第三は，経済構築の改善である。残酷な搾取がもたらした経済基盤の脆弱性に加えて，強烈な鬼神観念に基づく自然崇拝，祖先崇拝などの祭祀活動で神や祖先に献げる生贄として，子牛や羊など家畜を大量に屠殺したり，祭祀活動期間中の大量飲酒の習慣によって，苗族の経済はさらに深刻な影響を受けた。毎年の祭祀活動に莫大な財力をつぎ込み，巨額な借金を背負い，家計を破たんさせる例が後を絶たなかった。そのため，苗族の富の蓄積は非常に遅れ，生活が一層貧困になっていた。しかし，キリスト教入信によって，苗族の多神教的原始信仰は一神教の神に取って代ったため，莫大な浪費を必要とする伝統的な祭祀活動や，生贄にされた子牛や羊などの家畜の供養が禁止されたので，物質的な生活状況が改善された。こうして苗族のキリスト教への改宗の確信はさらに高められたのである。

三．雲南省禄勧県のX村落の現状

西洋宣教師の努力によって，苗族の間にキリスト教は成長し続けたが，キリスト教と苗族の神話・儀礼は1949年の社会主義の導入で禁止され，文化大革命などの政治激動の荒波に翻弄されて廃絶や中断を余儀なくされた。しかし1978年の改革開放以後，それらは徐々に復興を成

し遂げて今日に至っている。

2012年8月，筆者は中国の雲南省昆明市禄勧県の管轄する一つの村落において現地調査を行った。禄勧県は昆明市の北部に位置し，昆明市の管轄地の一つである。県人民政府所在地屏山鎮は海抜1,679メートル，平均気温15.9度で，昆明市からやく90キロの距離がある。禄勧県により直接管轄する鎮，郷は全部で16存在する。禄勧県は東西69キロ，南北105キロ，4,249平方キロメートルの面積と24民族の約42万人の人口を擁している。山岳地域は全面積の約9割を占めている。調査対象であるX村落は，禄勧県管轄地に含まれる山岳地域の苗族村落である。昆明市の西北部の郊外海抜2,350メートルの場所にあり，昆明市から約70キロの距離がある。全村には151戸447人あまりの農家があり，その中漢民族の農家は2戸だけである。X村は昆明市において大規模な苗族自然村である。村落において，通年の雨量が少ないため，水不足が非常に深刻である。また村落の場所は辺鄙的であり，交通情況も大変不便であるため，X村落の経済は他の地域の同規模の村落と比べれば，非常に遅れている。村落の栽培と養殖業も発達していないし，主な農作物はトウモロコシ，小麦，ジャガイモであり，畜産業についても農家の自家用の牛，羊，豚などを飼っているのみである。村落の全体の平均年収は700元未満であるので，貧困地域とも言われる。

X村の歴史資料を調べると，20世紀初期，西洋の宣教師の影響によって，キリスト教が芽生え始め，1936年に村の最初の教会が建てられた。文化大革命中，教会の活動は中断されたが，1982年から再開された。現在のキリスト教信徒の人数は全村の人口の6割を占め，約297人であり，信徒の年齢（老年，中年，青年）のバランスもよく取れている。さらに，X村教会は隣接5つの村，約10箇所の苗族集会拠点を管理し，中心的な存在であった。X村教会が特に誇りとするのは附属聖歌隊である。X村教会附属聖歌隊は，文化大革命直後，村の教会活動が再

開された当初，25人の熱心なキリスト者によって，農繁期に週1回，農閑期に週3回のペースで練習が始まった。現在，聖歌隊のメンバーが80人まで拡大し，農繁期と農閑期を問わず，ほぼ毎晩自発的に練習をしている。X村教会附属聖歌隊は5年前の全国少数民族音楽合唱コンクールで優勝の栄冠を手にした後，現在，昆明市だけでなく全国でもある程度知られ，社会各界の関心を集めた。

X村の教会は，国に認可された三自愛国教会の傘下に置かれ，三自愛国教会から派遣された苗族の牧師が牧会している。牧師は昆明市内にある少数民族の神学校(14) の卒業生である。苗族の教会では牧師の数が大変不足しているため，X村教会の牧師はとても多忙である。村の教会の正式な集会の日曜礼拝のために，彼は自分の村に留まって礼拝説教を行う。ほかの時間において，これ以外にも管理している隣村の10箇所の苗族集会拠点を巡回し，説教する。牧師が巡回に出かけた時は，X村教会の週間の集会では，教会生活の長い人々が順番に説教を担当する。

X村のキリスト者と非キリスト者住民同士の人間関係について大きな葛藤はなく，一応平和的に共存している。非キリスト者の住民はキリスト教の信仰を理解できないし，他方キリスト者住民は非キリスト者住民の行事を迷信と見なしている。日常の生活において双方の大きな衝突はこれまでなかったし，それぞれの信仰領域を相互に尊重し合っている。しかし，宗教の差異によって生じる家族内部の葛藤は明らかに存在しており，伝統的な祖先崇拝の行事について，異なる信仰の親戚同士の間で行事の進行や参加方法などを巡って揉め事が絶えない。さらに，家族同士のキリスト教への入信を強要することによって，家庭内の紛争を引き起こすケースも少なくない。

村のキリスト者人口の性別，年齢及び教育の実態を分析すると，以下の特徴が見出される。第一に，キリスト者の性別，年齢（老若男女）の割合が非常にバランスの保たれている点が挙げられる。漢族の農村にお

いて，青年や若者層は家族の生計のために都市部に出稼ぎ行き，多くの女性と老人は村に残された[15]。昆明市内にある苗族の村落の経済発展は遅れているが，苗族は漢民族と違って，自分の故郷を離れ，大都市部に出稼ぎに行く若者はほとんどなかった。恐らく，苗族は少数民族の容貌のゆえに大都会に行っても漢民族から差別され，仕事も見つからないため，自分の村に止まったと推測する。

第二の特徴は，非識字者の割合が高い点である。村のキリスト者の多くはほとんど教育を受けておらず，仮に教育を受けても小学校程度に留まり，中学校教育を受けた住民は非常に少ない。少数民族地域における教育の遅れによって，科学的な知識をもって急激に変動している周りの環境と社会情況に苗族の住民たちは対応できず，キリスト教などの宗教に頼る傾向にあると言えるのである。

四．苗族の社会におけるキリスト教の機能

宗教は社会の秩序を整合し，社会の安定を維持する機能を有しているので，宗教の社会的機能を適切に用いると，少数民族社会の調和と安定が実現される。キリスト教が発揮してきた社会的機能について，以下の三つの視点から検証する。

1．よい人間関係を築く

新約聖書の中では「主なるあなたの神を愛せよ」と並んで最も重要な戒律とされているのは，「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」である[16]。この教えに基づいて，よい人間関係を築くことが求められる。キリストに対する共通信仰のもとに集められた人々は助け合い，協力し合い，愛し合うことを教えられてきた。キリスト教の愛の教義は，キリスト者の人間関係の基準であり，キリスト教倫理道徳の重要な内容

でもある。この教えが現実の生活の中で実践されると，他者に愛をもって寛容の心を示し，互いに衝突することが減少し，調和のとれた人間関係の構築に役立つのである。

キリスト教信仰をもつ苗族のX村落において，ほとんどの住民はキリスト教の教えに日常生活の基準として従っていた。日常の生活，人々との交流，社会治安などあらゆる場面において，調和のとれた社会雰囲気が表れている。苗族の住民の日常生活を見ると，食前に感謝の祈りを捧げ，日曜の礼拝では，わずかな収入の中から惜しみなく教会に献金や農産物を捧げる。献金や農産物の一部は教会内部の身寄りの無い老人や生活貧困の家庭に慈善見舞として支給される。農繁期の終わり頃，教会が手のすいている信徒を組織し，老人とやもめ家庭の畑の仕事を手伝う。また葬儀があった時，教会の信徒は死者の家まで慰めに行く。さらに周辺の地区において自然災害があった時，教会は義捐金を集め，被災地の教会に送ったり，隣村の新しい礼拝堂の献堂式，あるいは収穫感謝祭の時，讃美と祝いのため，附属聖歌隊を派遣したりするのである。このように教会間の交流を通して，単に教会内の友好関係を築くだけではなく，信徒どうしの関係もよくなる。自分の貧困な生活と限られた物質条件のもと，苗族X村落のキリスト者が実践している感謝と博愛の心をもって，協力し合い助け合うという行動と精神からは，調和が取れている社会がそこにあると感じとられる。

2. 社会秩序の統合と整合

宗教は社会統合のための潜在力である[17]。一般の社会において，同情心，正義感などと言った道徳は社会秩序を維持する基礎であるが，社会の高度な発展に伴い，社会の安定を図るため，道徳だけに頼って社会の秩序を統合するには不十分となった。しかし法律や宗教などを加えて，社会の正常な秩序を維持することが可能になった。その中で，宗教

と信仰は社会全体あるいは個人の思想と行動に対して，統合的な機能を持ち，法律により果たせない社会統合の役割を行使できる。例えば，キリスト教のような救済宗教は，将来の救済を確実にするために規範に従うように信徒に説くことで，統合を行うのである[18]。人は「信仰・良心」をもつがゆえに何かをなす時，或いは「罪の意識」を避けるために特定のふるまいを慎む時，その信仰の体系が統合的機能を果たしているのである。なぜなら，人は身についた規則を破ることに罪を感じるからである[19]。キリスト教はすべてのことを適宜に，かつ秩序を正して行うがよいと強調している[20]。その意味で，キリスト教が安定した社会を主張し，混乱や無秩序に反対するのである[21]。

苗族におけるキリスト教は，道徳規範の再建と社会秩序の整合のために大きな役割を果たしてきた。調査したX村落において，キリスト教の教えはキリスト者の日常生活の行動の規範となり，家庭の平和，社会の安定を維持した。X村落のキリスト者の生活様式は村の非キリスト者と明らかに違った。キリスト者の離婚はほとんどなかったし，飲酒，喫煙，博打の現象も少なかった。非キリスト者の家庭において，男子の飲酒，博打によって家庭内暴力や離婚のケースは非常に多かった。このようにキリスト者の行動は教義の拘束を受けたため，社会の安定によい影響を与え，社会の安定を維持している。反対に，非キリスト者はこのような道徳的拘束を受けないため，生活上に多く問題が現れたと考えられる。

20世紀初期に苗族がキリスト教を受容した最大の理由は他民族からの圧迫と差別及び苦しい経済状況において傷ついた心を慰められたことである。物質生活において衣食の問題の厳しさ，民族尊厳において周りの民族から平等の位置を得られていない現状のもと，唯一の方法は精神的に抜け出す道を見つけなければならない。その時，キリスト教の平等，自由，博愛という教義は苗族の心の必要を満たした。もちろん，

21世紀の現代において，苗族はもはや他民族から深刻な圧迫と差別は受けていないが，X村落は極貧の辺境の山岳地域にあるので，日常生活はいまだ貧困の中にあり，近くの漢民族の村落と比べると，生活条件のギャップは大きい。さらに中央政府が推し進める経済政策や世界におけるグローバル化による影響という二重の大波が容赦なく苗族の村落にも襲いかかっている。中央政府はこの経済格差問題に取り組んでいるものの，辺境の少数民族の村々までは未だその政策の成果は到達しておらず，むしろますます中国の先進地域との経済格差が広がり，貧困化が進んでいる(22)。

こうした社会の現実に対し，苗族は大きな不満を抱いている。しかし世俗の悪に満ちた世界に生活している人々は，人間の平等を教えるキリスト教をひたすら信じることによって，自分の生活を通して社会に良い模範になり，完全に苦難を乗り越えられるという希望を教えられた。苗族の住民たちはこのキリスト教の希望に共鳴し，信徒は心の不満を吐露する機会と場所であるキリスト教の集会に通い，キリスト者どうしの交流，祈祷を通して，自分の悩み，不満，苦痛などすべて神に訴え，神が自分の問題を解決するように願った。このように，苗族は神との交わりによって，心理的不安と不満が調整され，精神的な慰めが得られ，自ら進んで社会及び自分の生活環境に対する不満や攻撃を放棄し，現実社会における自分の役割をありのままに受け入れるのである。まさにキリスト教は不穏な少数民族社会のよい安全弁となり，鎮静剤となったと言える。

五．苗族社会におけるキリスト教の問題点

外来の宗教であるキリスト教が苗族社会において成長する過程で，以下に言及するようないくつかの問題点も現れてきた。

1. 伝統文化の滅亡

苗族は独自の文字が存在していないため，口で歴史を伝承することが重要な役割を果たしてきた。さらに苗族の伝統民謡は民族大移動の歴史と文化を記録する手段であり，伝統舞踊は伝統的原始宗教の祭祀活動から進展変化してきたものである。苗族は蘆笙を吹いたり，蘆笙の伴奏で踊ったり，山歌を歌ったりすることが苗族の伝統文化の基礎を作り上げた。しかし，キリスト教の伝来は，こうした伝統的な文化の伝承に大きな衝撃を与えた。キリスト教は単に苗族社会の元来の伝統的な原始宗教に取って代わっただけではなく，キリスト教を中心とする概念やライフスタイルも苗族の日常の生活に浸透した。

確かに，キリスト教に入信した苗族にとっては，従来の風俗習慣の中の良からぬ部分が大幅に改善され，喫煙と飲酒の現象が減少し，祭祀活動の生贄が禁止され，結果として経済的負担が大きく緩和されたことは歓迎すべきことである。しかしその一方では，民族の特色ある民謡や踊りがキリスト教の賛美歌に，民族の神話，伝説は聖書の物語に取って代わられたこと，教会内部で，苗族の民謡を歌ったり，民族舞踊を踊ったりすることを禁じたことによって，苗族の優れた伝統文化の伝承がおろそかにされ，そのため，苗族の多くの民謡が失われてしまった。現在，伝統的な苗族の民謡を収集，記録，整理することは大変困難になり，伝統的な蘆笙のメロディーを復元することも不可能な状態になっている。

2. 三自愛国教会と家庭教会の対立

1950年代の中国三自[23] 愛国運動以後，すべての教会は三自愛国運動委員会の傘下のもとに統一されてきたが，近年の改革開放という政府政策の影響によって，香港，台湾などの教会からの支援を受け，三自愛国運動委員会から離脱して，家庭教会を設立するケースも増えている。それによって，三自愛国教会と家庭教会の対立の現象がしばしば起こる。

本来苗族の現地政府は，村の経済，宗教のことを全般的に管理しているが，現地政府の最高幹部はほとんど漢民族の出身であるため，宗教問題に深く入り込んで干渉し，民族対立の政治問題に発展しかねないため，それを恐れて，上級政府からの特別の取り締まりの命令や家庭教会の集会は反政府の言動がない限り，村の家庭教会の活動に対して見て見ないふりをしている。

そのような社会背景のもと，家庭教会の活動は非常に活発であり，相当規模の信徒数を有している[24]。調査によると，X村にも家庭教会が活動している。家庭教会は三自愛国教会と異なって，霊的な側面を強調し，歌にも踊りに優れた苗族生来の才能を生かし，讃美，踊り，病気の癒しを礼拝の中心とした。三自愛国教会側は，家庭教会が聖書を単なる装飾品と見なし，神の御言葉や真理より霊的なものをばかり追求し，明らかにキリスト教の真理に背いた異端的存在であると厳しく批判している。これに対し家庭教会側は，自分たちはキリスト教の教義に忠実に従い，教会堂という建物には拘らず，ただ聖霊の導きのもとで，家庭で自由に礼拝を守りたいだけであり，三自愛国教会こそ，聖書や信仰の内容を「知識」として信徒に伝えるばかりで，聖書に教えられた聖霊の導きと能力を軽視し，全く霊に満たされない偽りの教会だと応酬した。

おわりに

以上の考察を通して，苗族においてキリスト教が急速に成長した背景は，苗族社会の辺境化と貧困化がもたらした精神的空白であり，キリスト教はそのような空白部分を埋める役割を果たしたこと，さらに，埋め合わせる機能をもつキリスト教は苗族の助け合いの精神的な支えと基本的な生活保障を提供したことが挙げられる。様々な社会変革や経済の高度な発展によって，都市部や漢民族と違い，苗族は社会の一番底辺に取

り残されている。彼らの精神生活を支えるのは，地元の政府ではなく，宣教師が伝えたキリスト教である。苗族に欠けている経済と社会の再建の機能をキリスト教が埋めてきたので，より多くの成長の空間を得られたと言えるのである。

苗族がキリスト教を受容してから，すでに百年以上が経ったが，キリスト教は一つの宗教として苗族の原始宗教に代わっただけではなく，苗族の価値観や社会構造に対しても大きな影響と変化を及ぼした。しかし，その一方，キリスト教の受容の過程において，苗族の一部の優秀な伝統文化が失われてしまったことは見逃せない。これからキリスト教が如何に伝統的な苗族の文化と融合しながら，苗族文化の一部となり，少数民族に健全な宗教的役割を果たすのか大きな課題となる。

「苗族の人々にとって，キリスト教とは何か」について，筆者はまだ十分答えることができないが，しかし本論文を通して，キリスト教信仰から中国の少数民族における宗教状況を垣間見ることができると思っている。キリスト教信仰は，苗族の人たちにとって抽象的なものではなく，人生の苦難を乗り越えるための智慧と力でもある。

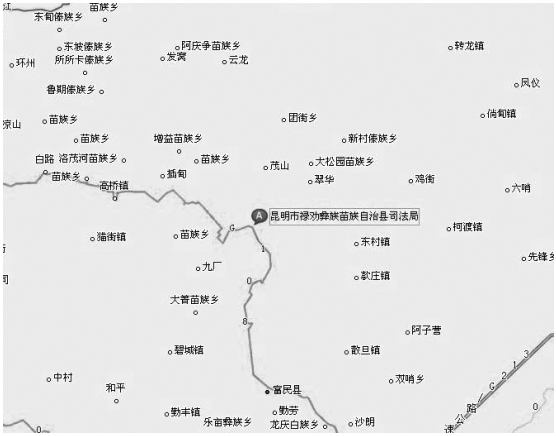

図１　雲南省昆明市禄勧県

注

（1）本研究は三菱財団2012年度研究助成（人文科学領域）により実施されたものである。

（2）鈴木正崇「ミャオ族の神話と現代—貴州省黔東南を中心に」『東アジアにおける宗教文化の再構築』，風響社，2010年。

（3）生明慶二「ミャオ族の祭祀芸能にみる響きの古代性」『研究調査報告』，第31巻，学習院大学，1990年。

（4）栗原悟『雲南の多様な世界』，大修館書店，2011年，191頁。

（5）楊学政『原始宗教論』，雲南人民出版社，1991年，１頁。

（6）栗原，前掲書，192頁。

（7）馬徳隣・吾淳『宗教—一種文化現象』，上海人民出版社，1987年，74頁。

（8）鈴木，前掲書，178－182頁。

（9）馬，前掲書，88頁。

（10）原誠「中国・雲南省のプロテスタント・キリスト教についての一考察」『基督教研究』第67巻第1号，同志社大学神学部，2005年，82－84頁参照。

（11）鈴木，前掲書，147－148頁。

（12）土司制度は元，明，清代にわたって各王朝より辺境に居住する非漢民族の首長（族長）たちに異なる位の官職を与えて間接統治を行ったシステムのことをいう。厳密にいえば，土司は武職であり，土官が文職であるが，一般に総じて土司と通称する。

（13）鈴木，前掲書，155－157頁。

（14）昆明市内に三自愛国教会によって設立した少数民族の牧師を養成する神学校がある。その神学校から卒業した少数民族の学生たちは，自分の部族に戻り，現地で教会の牧師としての仕事をする。

（15）徐亦猛「中国における農村の宗教に関する研究—キリスト教を中心に」『日本の神学』，第51号，新教出版社，2012年，130頁。

（16）新約聖書マタイ福音書22：37-39参照。

（17）メレディス・B・マクガイア『宗教社会学—宗教と社会のダイナミックス』，山中弘，伊藤雅之，岡本亮輔訳，明石書店，2008年，365頁。

（18）同上，365頁。

(19) 同上，366頁。
(20) 新約聖書コリント第一の手紙14:30参照。
(21) 徐，前掲書，132頁。
(22) 栗原，前掲書，194頁。
(23) 三自というのは，自治，自養，自伝である。
(24) 于建嵘「中国基督教家庭教会合法化研究」『戦略与管理』，第3号，中国戦略与管理研究会，2010年参照。